

私が東工大に赴任したのは平成二年（1990）で、それから丁度二十年が経ちました。この間、大学院重点化や法人化など、大学には大きな変化がありました。生命理工学研究科でも大学院重点化後 2 つの専攻が 5 つになり、学部は 2 年で学科所属、3 年でコース所属になるなどの変更がありました。教育内容も大きく変わってきたと思います。過去 20 年の生命科学分野の進歩はめざましく、教えなくてはならない知識の量が格段に増えましたし、教えなくてはいけないことの優先順位も変わってきたと思います。しかし、いずれにしても時間は限られていますし、もともと必要なことを全部教えるわけにはいきませんから、結局、後で新しいこと、必要になったことを自分で勉強して理解できるような学力を身につけさせる、ということになるのでしょうか。基礎学力が「ゆとり教育」のために落ち込んだということがよく言われていて、その通りのようですが、「ゆとり教育」は、始めるときには多くの人が賛成し、それなりに目指したものは悪いことばかりではなかったはずで、ただ元に戻すのではなく、「なにがいけなかったのか」、「残すべきものはいいのか」を反省することが必要だと思います。ところで、「大学は変わった」という時、「変わった」と私たち教員が感じるのは、上に書いたような制度や教育内容もありますが、むしろ大学の雰囲気や学生の気質ではないでしょうか。

東工大に来て間もない頃、ある学生が時々予告なしに休みがちになったことがありました。当初、学生が休んで研究が進まないのは困りますが、こちらから電話したりする必要もないだろうと思いました。中学や高校ではあるまいし、教員が学生の私生活まで指導する必要があるだろうか、と思ったものです。ある日、その学生が私の部屋にやってきて実験について話し合った時、頃合いを見計らって、大学に時々出てこられなくなるのは何か理由があるのか、聞いてみました。私は、その学生はちょっとつらくなると、学外の活動に逃避しているのではないかと、思っていました。しかし、学生は話しているうちに涙目になり、実は、朝起きて布団から出られなくなる、と言うのです。私はそのような精神的な状況がよく理解できず、「夜、もっと早く寝るようにしたら？」などと言って別れたと思います。当時は「鬱」という言葉は少なくとも一般には知られていなかったと思いますし、ノイローゼという言葉はよく使われていたと思います。恥ずかしながら、鬱とノイローゼ（神経症）が違うものだと思ったのは比較的最近のことです。その学生の話と同僚にしたところ、その人は、実は自分も大学院の頃そういうことがあって、自分がなまけもののような気がしてずいぶん悩んだ、と言うのです。私はこういう現在立派にやっている人で

もそういうことを経験しているのか、と驚きました。その時から、多少、問題のある学生の見方が変わったような気がします。それから現在まで、いろいろな問題を抱えた学生に出会いました。そういう時、一番苦しんでいるのは当人である、というのは当たり前のようですが、そう考えることは必ずしも容易ではありません。問題を抱えた学生の心の中の動きや真の原因を見つけるのは容易なことではありませんし、学生間の人間関係などはなかなか教員には気がつかないこともあります。実際、外見では悩んでいる様子は見えないことが多く、「けしからん」と思いがちです。学生のプライバシーに介入してはいけないとも思うので、よほど信頼関係を築いてからでないと、あまり突っ込んだ事は聞けないのが実情ではないでしょうか。

研究がうまくいかないと誰でもめげますが、うまくいかない時こそ重要で、そこでいろいろ考え、工夫してうまくいくようになると、今後それが大きなバネになる、と学生には言うのですが、現実はそのままとならず修了していく学生が多いのも事実で、それが原因で、落ち込んでしまう学生もあります。

「人は変わりうる。」というのはフィロソフィーというほどのことではありませんが、もうひとつ、学生と対峙する時に忘れないでおきたいと思っていることです。チャランポランにやっている学生がある日突然目覚めて熱心になる、ということなども何回か経験しました。「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」というのは、「花は毎年同じように咲くけれども、それを見に来る人は毎年異なる。」ということのようですが、ここでは「花は毎年同じように咲くけれども、見る人の方は変わっていく。」と解釈して表題にしました。

赴任当時、大学の教員の最大の責務は「研究者を育てること」、「後継者を育てること」だと思っていました。研究には伝統が重要で、研究のレベルを保つためには次代を担う研究者を育てることが必須であることに異論はないと思います。ほとんどの大学の教員は、科学することの興奮・喜びを経験し、それを駆動力として研究を続けていると思います。そういう興奮・喜びを学生にも経験してもらいたいし、それをきっかけとして研究者を目指す人が増えてくると嬉しい訳ですが、卒業生のうち、アカデミアに残って、あるいは企業の研究所等で研究を続ける学生の数は全体から見るとわずかで、大半の学生諸君は研究とは直接関係のないところに就職します。結局のところ、学生のニーズは様々で、研究者を目指す人ばかりではないわけですから、なにかひとつの不思議な自然の現象を、研究を通していかにして理解し、科学の知識として確立するかを実感してもらい、そこで培った科学的な考え方を将来、社会の様々な場所で生かしてもらおう、ということが大学における教育の目指すべきところではないか、長年学生諸君とつきあってきてたどり着いた自分なりの結論です。